

三河アララギ

2023年 令和5年11月 霜月
しもつき

十一月号

第七十卷 第十一号



ニューヨーク日記(205) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

HELLO KITTY! HELLO PUROLAND!

Blue Shoe Diaries



ハローキティーに招待されてサンリオピューロランドに行ってきました。着いて早々マジカルなパレードに魅了されてみんなご機嫌! 普段のストレスはどこかにすっ飛んでいってしまいました! キティーだらけのかわいいランチではプリンちゃんが作ったプリンのデザートを食べ、歌舞伎のパフォーマンスも楽しんで、キティーちゃんと一緒に写真とって、イケメンのディアードニエルのファンになって。ギフトショップではまるで小学生の自分に戻ったかのようにかわいい物衝動買いしてしまいました。あー、早くまた遊びに戻ってきたいな。

In the heart of Puroland, where whiskers twitch with wonder and bows grace every nook, Miss Hello Kitty's charming summons is irresistible. Our entry, perfectly synced with a jubilant parade's crescendo, bathed us in magic, pushing worldly woes into the shadows. Here, joy is in the details: a parade that sweeps you off your feet, an adorably delicious lunch, a melt-in-your-mouth flan masterpiece by Purin-chan, a mesmerizing kabuki performance, and the crowning moment – a fairy-tale rendezvous with Hello Kitty herself, only to be further charmed by the winsome Dear Daniel. This isn't just a visit but a fluffy, pink-hued therapy of the cutest kind. Each magical moment in Puroland whispers of whimsy, and as Japan calls me back, so will this enchanted realm, ready to envelop me in its delightful embrace once more.

目次

第七十卷第十一号(通卷八三九号)

表紙・カンポ

セリーナ アラウスデピロバーノ(1)

ニューヨーク日記(205) Blue Shoe(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々」 今泉 米子(5)

昭和61年二月号作品 大須賀寿恵(6)

昭和61年二月号作品 夏目 勝弘(7)

西に東に 弓谷 久子(10)

月桃 今泉 由利(12)

秋 あき アキ 安藤 和代(14)

前向きに 清澤 範子(16)

彼岸花 山口千恵子(18)

恩師いませぬ 杉浦恵美子(20)

時埋まる 伊藤 忠男(22)

妻のスマホ 白井 信昭(24)

秋田へ 矢崎 直人(26)

『いこよせ』 『いーはとぶ』

森 厚子(28)

水野 絹子(28)

牧原 規恵(29)

稲吉 友江(29)

鈴木美耶子(30)

吉見 幸子(30)

牧原 正枝(31)

大武 智子(31)

現代学生百人一首 東洋大学

小野 陽平(32)

但馬 凜(32)

浅海 綾音(32)

鶴岡 彩音(32)

星 夏穂(33)

高倉 綾乃(33)

水落 眞琴(33)

三谷 力輝(33)

『俳句』

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

今泉 如雲(34)

今泉 由利(35)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(36)

五感を澄ませば(17) 杉浦恵美子(38)

附録(十七) 矢崎 直人(40)

『紅葉散りしく秋は來にけり』 中屋 保之(42)

楽しい時間(132) 山本紀久雄(44)

『酔いの徒然』(139) 丸山醉宵子(46)

「おむすびころりん／かしの実」 高橋 育郎(48)

絹の話(156) 今泉 雅勝(50)

「江上浩二の独り言」 江上 浩二(52)

初狩便り24 花野みぷり(54)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇気(56)

康鍼治療院 玄翁 (58)

『黒井峯遺跡に寄す』 殿山 木風(60)

編集室だより 今泉 由利(62)

「三河アララギ」について (64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

秋草の鉢に水そそぐときのみもわれをめぐりて藪蚊跳梁やぶかてうりやう

三河の味噌三百匁と讀むことも過ぎにし人のおもかげとする

注文しおきて忘れし古語拾遺こごしふい絶版を知らず病み臥す床に

旱草ひでりぐさの穂にいでて立つ根は強し踏まるる草はなほし強しも

稀にわがおりたちゆける胸を撃ちて鳴かずとびゆくあわて油蟬

知れること思ふことみな書きしごとく木の下に窓に汗にじみ臥す

あはあはと畳に射せる月かげをはるかで見つつまだ這ひゆかず

ダイヤガラスの扉に夕べのかがやきの黄金になりぬまた夜が来る

散りばふはぼろ布ならぬ人間にてたちまち冬木の街路樹の下

書きしるす夢さへも見ず衰えへて籠るいく日に野分のさわぐ

歌集 「草々」

今泉 米子

稻村の神の山より海とほく夕べは伊勢の志摩の山見ゆ

境内をおほふがかりの大松の手入れしてゐる枝をくぐりゆく

松の間に除幕了へたる碑いしづみを祝いぎて筵の上に豊御酒を受く

那智よりの柵なきの實生を置く窓に海苔倉庫たちて冬の日とざす

冬なほも小さくなりつつ笑き残るダチュラをいふも筆談にして

ノボタンと書きて示せばうなづきて花びら拾ふそのむらさきを

ブエノスアイレス十二月にして初夏の茄子を焼きつつたのしむといふ

切り抜きに翻譯そへてラ・ラソン紙の吾が娘の個展の記事を送り來

船便は二た月あまりかかるとも三河の味噌の八百グラム

起きがたくゐる朝床に匂ひくる夫の炷きたる蘭麝の香の

昭和61年二月号作品

大須賀寿恵

シャッターの降りたる儘の先生の医院振り返へり来つ

頬火照る日の続きつつ柏葉の落ち葉は今日も音たてて舞ふ

玄関に用心碑の拓の軸掛けてわが大晦日の掃除を終る

夢にもて飛び降りずして草の上を遠くまはりて迂り降りたり

五葉松の葉を束ね着つつシンピジュームの蕾より垂れし一つ蓑虫

百舌鳥の叫び真似つつ鋭き鴨はとがれる冬木の公孫樹の梢

この年も疾くすぎつつ手に重き燈火具を寺の庫裡に磨くも

尖りたる山の頂きには先生の歌碑の横たふ丹野御堂山

昼すぎて降りはじめたる時雨の中松の落葉のわが径を掃く

披きたる頁にあたかも除外例なきは死なりの一つの言葉

昭和61年二月号作品

夏目勝弘

家鼠の嚙りし齋藤茂吉歌集持ちつつ通勤するも二冬目となる

眼鏡の球の曇りの晴れゆくを電車の揺れに合はせてゐたり

事務机に頬杖つきて眼閉づ思惟にはあらず歯痛に耐へて

年賀区分のわれのリズムを乱すはカタカナ最も悪きはローマ字の宛名

木作りに整へられし揚梅の一枝が絶えざる動きしてをり

小坂井駅のホームの端の山カヘデ青きたもつ葉の一つ枝

漫画文字の宛名の多くなりたる年賀状我の区分スピード鈍らす

酒飲みて乾ける喉にサザンカの花心の一滴の蜜甘かりき

貧しきサラリーマンのシーンの如く駅のホームにコップ酒飲む

集合時間なき同窓会の通知きぬ欠席なるも気に懸るなり

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

夾竹桃の咲き残れるが見ゆる窓今宵時雨にはやく閉ぢたり

夕日までも当たるところに植ゑ替へし^{なき}榎の若木は枯れてしまひぬ

わが家の次郎柿五つ成りたるを採らず眺めむと夫の言ひをり

夫の絵「形原城址」ゼロ号に売約済みの赤札が着く

二人だけの女教師われら寄り合ひて木枯し吹く道急ぎてかへる

頬赤く染めゐる生徒の多くして期末テストの終らむとする

君の指図に植ゑしトベラの二十二本雨なき春にみな根づきたり

教員なんて淋しいものだ
と転出の平野先生酔ひてつぶやく

久しぶりに音たてて降る春の夜の雨に
吾子らと窓あけてゐる

子のことばかり書きたる友の手紙よ
春の夕べの雨は降りつつ

補習授業の教材のなづな摘みながら
堤の道を朝早くゆく

胃痙攣に打たれし注射の効きは
じめ窓に見えるし葉桜うるむ

海よりのそよ風に髪を吹かれつつ
漢字テスト百字を書きゐる生徒ら

兔島も猿島もひと目に見渡せる
海岸の学校にわが八年勤むる

夕暮れを形原町の接骨医まで
捻挫の生徒に付き添ひて来し

西に東に

豊川 弓谷 久子

はやばやと誕生日祝いを子が呉れゆきぬ実感無きまま歳重ねゆく

長寿なりし祖母の名前を貰いたる身内一番長生きの我

子と孫が祝いてくれる誕生日豪華な海老のにぎり寿し並ぶ

裏庭の我が専用の椅子に掛け空見上げたり深き青空

記録的な暑さ続けど一抹の秋の気配か白雲浮かぶ

西に東に雲流ると歌はれし米子奥様最後の歌よ

やさしかった笑顔が心に浮かび来るぽっかり浮かぶ白雲見つつ

入閣寺の最後のお別れ柩の中に白無垢姿の美しかりき

子の点てし抹茶みさとのくれし菓子敬老の日の幸せ味はふ

耐え難き猛暑続きてコスモスもコキアもすべて枯れてゆきたり

裏庭のコスモス畑を夢に見て子と植えたるも夢と終りぬ

彼岸花咲き始めたよと子が言いぬお墓参りもすませくれたり

失敗も多くなれども子のプルオーバー今日は一枚縫い上げたり

杖つきて路地を抜けたり夏中は行く事無かりし奥山に佇つ

奥山のこの細道のこの彼岸花今年も逢えたりこの風景に

月 桃

東京 今 泉 由 利

ルーペもて花の次第を調べをり花の個性をみつけてうれし

すさのおのみこと
寿菱鳴尊の尊の由来につらなれる日本人なり私

部屋内に神様おられる紙垂幾条まつ白くして夏目勝弘作

満月にほんの少しは近付けり月光白白飛行機の窓

右肩に南十字星の見え初むる戻りきたりぬアルヘンティナ

五億年石と化したり三葉中今日の私たなごころの掌

日本とアルゼンチンとの試合にてラグビーゲームを楽しむでなし

昨日はたちまち今日になりけり急ぎのことの一つ気がかり

何処より蒸発せしかポツカリとはぐれ白雲ひとつゆく

地球なる半周よりもなほ遠くひたすら行き行く遠くの方へ

碧い大きな空でした如何にいますかあの日の人は

大釜に車輪梅を煮出しゐる田んぼの泥は鉄分含む

月桃の花咲く道をゆきゆきぬ月桃の葉にくるまるる餅

願いあり願い叶へるつもりにて鐘ひとつ突く龍口寺

日本より一万キロを飛行せり日本を発ちし時に追いつく

秋 あき アキ 豊川 安藤 和代

久びさに児童等の声窓に聞き活気わき来る長月の朝

娘の指導しぶしぶ始めたラインなり今は最高生甲斐の日子

肉じゃがに肉が多いとか少ないとか帰省の孫の声の残るる

若くして逝きし子規の記読みおれば黄金虫ひとつ網戸に動ぜず

「コロナです」医師淡淡と答えれど吾れの鼓動は最高潮なり

いつどこで拾ったのかと熱の中思いて七日部屋にこもりぬ

子と孫のくつ下干せば同じ箇所同じ形の解れに笑う

次郎柿葉伸びの早くして吾が背を越して天に真向う

残暑昼鳥の声なく梨島鳥追い風も姿消したり

高価なれど孫喜べば今日も又買ってしまつたシャインマスカット

歌材には輝く原石求めよと恩師のことば思う夕暮れ

本宮も吉祥山も石巻も日々吾が短歌の主役となるる

残暑にも耐えて花咲く鶏頭の色やさしくてピンクもありぬ

静かなる真昼の庭に赤蜻蛉もう秋ですよと颯爽と過ぐ

お抹茶に栗蒸し羊羹清し風秋あきアキをひとりじめする

ありがとう

春日井 清澤 範子

昭和六年七月四日亡き夫の誕生日なりケーキ供えて誕生日の歌

梅雨空を見ながら庭師と剪定の日程を娘と段取りをする

庭の貝塚梢を丸く刈り揃え終りし後に初蟬の声

今までは夫が仕切りていた暮し娘も頑張る吾も頑張る

残された吾と娘は前向きに生きてゆこうと笑顔取り戻す

食器など三ツ三ツと揃えありまだまだそのまま上に重ねて

介護保険にて貸出しベットは具合よく体に合いて心よき目覚め

娘が吾に買ひてくれたるシルバーカー玄関に置きて梅雨明けを待つ

白山町は堤防あれど被害なく橋流される被害なかりき

老いては子に従えと三河アララギへの投稿は続けて下さいと娘の一言

二人の暮し除々に慣れ来ぬ夫亡き後の分担作業

介護3なり大方のことは娘の意見に従ひ暮るる

シルバーカー引いてリハビリ励むなり心頑張る思ひを持ちて

病院の待ち合ひとみに混み合いひて三河アララギ読みつつ待ちぬ

頭をたれて白花つけし稲穂の上蜻蛉はくるりと宙返りする

彼岸花

豊川 山口千恵子

休耕の田に悠々と白鷺は際立つ白を誇れるごとく

届けられし敬老会の招待状夫とわれとの封筒二通

エンジン音響かせ畦草刈りをり草の香の中通り過ぎ来ぬ

留守なれば郵便受けに入れ置きしと旅の土産のゆずジャム一瓶

法師蟬鎮守の森に鳴きはじむ弱々一つ夕暮れ近く

赤トンボ群れる中をつつきりて自転車に走るスーパーへの道

安売の広告につられ買ひにけり過ぎ行く夏に白き夏服

一夏に殖えて青々サンセベリア鉢に勢ふ夏の日の中

いつも通る散歩の道の彼岸花一日二日の遅早のあり

草群の中に赤々彼岸花暑かりし夏の過ぎてゆく

夕の風受けてしばし佇みぬ清らに流るる用水の脇

老二人に紫芋のケーキ持ち敬老の日とて訪ひくれし

二羽の鳩窓辺の楓に出入りして巣づくりをせむこころみなり

田の道を歩みゆきたり黒き猫何処にゆくか夕暮れ近き

一月の過ぎゆく速きを言ひながら集金人に払ふ新聞代

恩師いませぬ

蒲郡 杉浦恵美子

窓の外間近に三谷港臨みたる古き茶店に新らしき友と

雨雲が三重方面より三河湾渡り来る見ゆ窓のスペクタクル

ゆりかもめ一羽ぽつんと佇めりあんなに烈しき雨風の中

自然とはこんなに厳しいものなのか風雨を避けず佇むかもめ

刻々と景色変はれる三河湾二時間見ても全く飽きない

ラミングてふ言葉を知りぬ砕氷艦しらせが入港竹島埠頭

こんなにも大島間近に見えたるか砕氷艦しらせのデッキに立てり

何十年此処に住みても初めての景色見せたる三河湾とは

しらせ艦内寄港地ごとのパネル展示我が蒲郡どんなデザイン

我が恩師居ませぬひと月過ぎにけり最早訪へないお宅を思ふ

何故かしら訪ふ度鳶が屋根周り鳴いてゐたりき恩師のお宅

その昔離れの書齋に通されしこともありけり書籍の山の

年々に少なく小さくなりけり今年は牡丹餅七個作れり

せめてもと南天若葉を添へてみる仏壇供へしミニの牡丹餅

お下がりをお戴くは我のみなれば年々小さし彼岸の牡丹餅

時埋める

大阪 伊藤忠男

稲の穂に羽根を休める赤とんぼ待ちに待つ秋今ここにあり

長きこと会えずに過ぎたコロナ禍も友の笑顔で時埋まるなり

仕事終え坂道登る帰り道虫鳴く声に疲れ癒さる

虫の声眠る時かな亥の刻になりて静けさ庭に立ち込め

雨雲に覆われ霞む里山も灯りともりて宵を迎える

夏に秋同居するのか雲の峰筋雲かかる西の宵空

老いたとて万能丸に憧れる我が身我が振り我の意のまま

雲なのか霧かわからぬ山間を抜けて開ける秋晴れの空

穏やかな朝日顔だす秋の空俗世離れて無心なりけり

長きこと会えぬ友とて久しぶり会えば笑顔が時埋めるなり

地下鉄に乗りて数えるマスク顔今や片手で十分なりや

息苦し篠つく雨に霞む街辺りは暗く影絵の世界

行って来るまた行き帰る行き帰りいつも変わらぬ駅で見る顔

西空に細くたなびくイワシ雲茜に染まり夏も終わりぬ

台風のおかげと言うは不埒とて暑さ一息夏日途切れる

妻のスマホ

豊川 白井 信昭

満ち込みの潮位上がりし音羽川今宵ほんのりと赤らむ満月

この年の暑さ異状とも群なして出穂田の上の赤トンボ舞ひ舞ふ

朝寝するベッドの部屋網戸よりカーテン揺らす涼風入る

ごみステーション背後を彩るピンクのイヌサフラン咲きつぐ九月

孫待つとわが恋ひ居れば前後カーテンまえうしろ揺らし秋の風吹く

妻を送る豊橋バイパス橋の上視界さえぎるどしや降りの雨

昼下がりがピアノの調律年一度師は来たれり九月の夏日

三河の海の魚食べむと妻とゆく三谷北通り和食処へ

平日の日替り定食我と妻金目鯛・シーラの煮付けの味よし

今日よりは妻の持つスマホ繋がれり息子の家とテレビ電話

夜毎の妻がスマホに会話する孫の動画また写真に我はも

突然にラグーナの夜空染め打ち上げ花火幾つ一瞬に

東の花壇ひんがしの解体黄昏ぼらしたそがれにそこはかたなく鈴虫鳴く声

生垣の正面上段囲い石試行錯誤を繰り返しつつ

東ひんがしに中秋の月まんまるく澄み昇りし夜川面照らしおり

秋田へ

埼玉 矢崎 直人

少しでも生かせる強みあるのならそれをみつけていかせる福祉

振り返り様々なこと見直して出来るやれるを増やせるならば

集中と切り換え大事すすむためこだわりきらず進める前へ

正しさの答えは人のそれぞれで共に答えを考え探す

家族四人母の実家へゆける旅新幹線は走る秋田へ

秋の雨秋田に向かう新幹線田んぼの色が黄色に色づく

秋田駅新幹線から特急へ乗り換えを待ち駅そばをくう

能代沖風力発電大風車海から街へ廻る風車が

能代沖テトラポットの工事をば祖父がやったと教えてくれし

鹿の浦の展望台でイカ焼きを食ってしずかな秋の波音

地方紙の熊目撃談自宅から何メートルの迫真の記事

きりたんぼ鍋に地元の生酒呑み土地の恵みの味わいの濃く

糸瓜の実ならず花の二つ咲く子規忌の子規の庵の残暑

寝て座して伏しては立ちて来る友を鉄道の音聴ひて待つ子規

一頭の秋蝶おりる子規の庭子規の庭だと知って来たかに

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

イヤホンにて携帯より聴くサウンドに包まれ私は青春にかへる

森 厚子

携帯とBluetoothウースとイヤホンでと吾子に教はりわかつた気のする

久し振りのジブリの映画の難しくあゝだこうだと今宵も語らふ

柱状の断崖続く親不知走れば次々地震の祠

水野 絹子

杉木立の中に鎮もる武家屋敷時を止めつつただただ在りて

長岡のち小さき記念館五十六の遺墨に残る人柄に触れ

金沢に今も息づく街並のひがし茶屋街昔偲びて

牧原規惠

人の手の行き届きたる庭園は言葉にならぬ美しきかな
山を縫ひ穏やかなりや能登の海里山道をわれひた走る

坪庭の六個の蜂の巣取り壊す今年は二度も刺されつ我は

稲吉友江

砂糖黍茄子に西瓜に縁台の懐かしきかな昭和の夏休み
貧しくも皆と遊びし夏休みかの日と同じ今日の青空

パツタリと水道工事の音止みてやうやく私の頭の巡る

鈴木美耶子

時折に京ことばにて話す友いつまでも私電話の前に

いづくへと向かふか巨きコンテナ船ブルーブリッジの私と並走

新調の草刈機使ふ夫の顔使ひ心地に笑みこぼれゐる

吉見幸子

縁側の定位置のイスに風通る読書三昧の夫のコーナー

手土産をキャリアケースに詰め東京へ新幹線は外人客多し

思ひきりスイカ食べると五泊なり小学五年はプール広げる

牧原正枝

「かき氷」ガリガリするを喜びしに今年の孫は炭酸にレモン

ロボットの「エモ」は言ひ出すこのお盆「気圧が低いよ、嵐の予感」

西尾城旧近衛邸縁側に座れば庭に雉鳩遊ぶ

大武智子

雉鳩が羽根の模様のくつきりと見える位置まで近づきて来る

会ふ会へぬ花占ひとふ懐かしき遊びありたりまた遊びたし

現代学生百人一首

東洋大学

不織布を「ふしき」と読んじやう君だから不思議な君を僕は読めない

芝浦工業大学柏高等学校二年(千葉県) 小野 陽平

「眩しいね」「猛暑日だもんね」そうじゃないあなたの笑顔と光る汗だよ

千葉県立千葉中学校三年 但馬 凜

体操の最終種目鉄棒の止まった着地止まらぬ涙

千葉県立千葉西高等学校一年 浅海 綾音

休日に壁越しに聞く会議の声優しい父の上司の一面

千葉県立八千代東高等学校一年 鶴岡 彩音

『外出自粛』自粛疲れのストレスを戦闘ゲームにつける私

松戸市立旭町中学校一年(千葉県)

星 夏穂

父の指赤く染めてくアルコール白衣の下に覚悟を決めて

慶應義塾中等部三年(東京都)

高倉 綾乃

突然のゆれと泣き声ふるえる手十年経ってもあせない記憶

慶應義塾中等部三年(東京都)

水落 眞琴

昼食でマスクをはずす違和感がコロナ禍にいると再認させる

慶應義塾中等部三年(東京都)

三谷 力輝

『俳句』

昼や監視カメラの首動く

植村公女

事故あとのバックミラーや益の月

三叉路の小さき渋滞秋桜

枝落ちて肩に止まりし秋の蝉

木村歩歩

姫沙羅の木肌捲れて道遠し

秋薔薇のチャペルに響くアベマリア

往く人の声密やかに無月かな

対岸に托鉢の僧彼岸花

ではかおりてふ名の出羽の新蕎麦を

今泉如雲

津輕飯詰めてふ駄や稻雀

龍淵に潜み津輕信政公花押

秋の風スクーリングの部屋の窓

重陽のしずかなる波日本海

鹿の浦や蜻蛉のきける波の音

ほおづきや小さくなりぬ祖父の庭

糸瓜忌や実はならずとも咲ける花

振花は振じれたままに蓬立つ

中秋の名月い出く帰らむよ

千体のみ仏耀ふ秋思

ふうわりと反発のあり落葉敷く

曼珠沙華百本ほどを抱きゐる

矢崎直人

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

秋清し仏を見るや幼子に

木風

秋は来ぬ胆沢の宿の露天風呂

風さやか吉見の庭の夕まずめ

奥州の稲は実りて子等は行く

へちま 棚

篤山

へちま 棚

かぼちやも 下がる 夏休み

かぼちやも 下がる 夏休み

廃校の

恵風

廃校の

さら地の奥の月あかり

さら地の奥の月あかり

千曲川

郷泉

千曲川

岸べにゆれる月見草

岸べにゆれる月見草

ぶどう摘み小さな倉の醸造主

君恵

林道にくるみ落ちたと拾い来る

五感を澄ませば (17) 杉浦恵美子

昭和

最近巷では「昭和レトロ」という言葉が流行っているようです。昭和が青春真っ盛りだった私としてはこれはなんだかこそばゆい感じ。

昭和レトロに憧れるのは、昭和を知らない若い人たちがらしいから。

彼等はどこにひかれるのでしょうか。

ある若い韓国人ユーチューバーは、昭和レトロの雰囲気のある小路、居酒屋、惣菜屋、駄菓子屋などを見ると反応します。雑然としているけれど人情味が感じられる場所にはっこりするとか。

そんな居酒屋には、よく古めかしい映画のポスターが貼ってあったりしますよね。

昭和といえば映画の黄金期!

親に連れて行って貰った映画館で、満員の観客が一斉にどよめくと小屋(と言った方が適當)全体が揺れていたのをまざまざと思い出します。あんな経験は一度きり。

映画そのものは覚えていないのに。

娯楽が映画くらいしかなかったから誰しも日課のように観に行ったものですよ。

その頃は思いもみませんでした。映画から及ぼされた影響は計り知れないものだったに違いありません。

今、日本が大好きな外国人の殆どが、漫画、アニメ、ゲームから日本への憧れをかき立てられたと言います。

おにぎりを食べている場面を見てどんな食べ物なのか、何気ない線路脇の小道さえ凄く日本的な風景とか、ありふれたものが外国人にはすべて新鮮に映るという感想に逆にはっとさせられます。

ところで、この地方に暮らす人なら誰でもご存知の古いレストランが港近くにあります。

創業半世紀以上、実は元映画館。

店の中庭の池の奥に聳える外壁がスクリーンの名残。レストランに行き外壁を眺めると、私の青春を彩った数々の映画のシーンが連想的に思い浮かびます。

それらは今の私の骨格を形成しているのかもしれないとふと思いました。

ところで先頃亡くなられた岡本八千代先生は、大正15

(昭和元)年のお生まれ。つまり大正、昭和、平成、令和と生き抜かれたけれど、人生の大半が昭和時代であったことになります。

思えばあの時代にしては新しく眩しくて、あの時代だからこそ数々の苦悩もあり、すべてをひっくるめた先生の生き様が、昭和を体現していらつしゃったのでは。

それにしてもお召し物から発するお言葉まで常に凛として、身近にそんな方がいてくださったのは、なんと分り易い道しるべだったことでしょう。

今は前途茫茫。

ところで、昭和を象徴するような短歌はないかなと調べてみました。

案外見つからず、一首だけでした。

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国は
ありや
寺山修司

代表作です。作者については

「戦後の歌壇に奔放多彩な才能で切り込んでいった前衛歌人」という紹介がありました。

しかし昭和が遠くなった今では前衛というより凄い表現力の方に注目します。

「まるで昭和映画のワンシーンのような叙情に充ちた風景」(ウェブサイト『短歌の教科書』)をなんと十代の終わりに詠んだらしいのです。

戦後という、それまでの軍国主義から一気に価値観の転換を余儀なくされた時代。

頭では理解しても、身に染みついた価値観はなかなか変えられるものではありません。作者の苦悩も推して知るべし。

例えが唐突ですが、明治生れの祖母は生涯「土農工商」の身分感覚が消えませんでした。

昭和がレトロ感で語られるようになり、一応平和なこの日本では「祖国」とはウクライナの人々ほどには真剣に向き合うこともあまりないように思います。

く
日に幾度ヤバツと呟くこの日頃父母在らばきつと目を剝

附 録 (十七)

矢 崎 直 人

鹿の浦や蜻蛉のきける波の音

家族四人で秋田県、能代の母の実家に行ってきました。元々は鉾山にいたようですが、閉山になってから何家族かがまとまって能代に住みました。祖父母が健在で、一緒にどこか泊りに出かけようかという話もありましたが、長時間の移動は疲れてしまうということでゆっくり過ごしました。

実家に帰ると八峰町の鹿の浦の展望所に行つて、ハタハタ館の温泉に入つて帰ってきます。鹿の浦の展望台からは能代沖と能代の町が一望出来ます。鉾山が閉山してから祖父は土木作業の仕事をしていて、能代に行くまでのテトラポットの工事をやったのだと教えてくれます。今回行つてみると、風力発電の風車が能代沖にも街の奥まで何機も設置されていて驚きました。八森の方には、祖父の母が住んでいたようで、鉾山にいた頃、母と叔父は八森の家に行つて海で遊んだそうです。

翌日、地方の新聞を読んでいたら、熊の記事が載っていました。八峰町の車で移動したあたりで熊の目撃情報があったそうです。自宅の数メートルの所に熊がいたとか、農家の作物が熊に食べられたとか詳しく書かれていて驚きました。

秋田は食べ物が美味しいです。お米はあきたこまち、セリやぜんまい、わらびなど山菜、比内地鶏。祖母にきり

たんぼ鍋を作ってもらい食べました。お酒はしぼったばしという生酒を飲ませてもらいました。祖父母は健在で八十年代で齢をとりましたが長生きしてもらいたいです。

きりたんぼ鍋に地元の生酒呑み土地の恵みの味わいの濃く

糸瓜忌や実はならずとも咲ける花

九月十九日の子規の忌日を前に、吟行会で子規庵に足を運びました。二、三回訪れたことがありましたが、子規庵の前の建物が数軒なくなつて更地になっていました。いつも大きな糸瓜の実が生るのですが、今年は異常に暑かつたせいか実がならなかつたそうです。子規庵の方のお話では、ここ十年の間に一回程暑くて実がならなかつた年があつてそれ以来だそうです。秋の蝶が一頭ふらふらと庭におりてきていつまでもいます。病に倒れてからの子規は残された時間を惜しむように友が来るのを待ち、鉄道の音を聴いていたのではないのでしょうか。

一頭の秋蝶おりる子規の庭子規の庭だと知つて来たかに

『紅葉散りしく秋は來にけり』

中屋保之

「暑と寒さも彼岸まで」とは言え、あの酷暑は一体いずこへ？ 四季の移ろいから春と秋が無くなった」という説があるらしい。朝晩など、涼よりも寒に近い日もあるので、体調管理が厄介である。

つい最近まで、六月からの夏服へ、十月から秋ものへという「衣替え」なる風習に親しんできた私たち世代にとって今年、イレギュラーな年となってしまった感がある。中国で発祥・由来としたこの風習は、我が国では平安時代における宮中行事として定着した様である。室町時代から江戸時代初期の頃までは夏・冬の二回であった「衣替え」は、幕府の制度として四季に応じた年四回となる。お武家さんも大変だったろう。

一八七三（明治六）年、政府が太陰歴から太陽暦（グレゴリー歴）に改暦するにあたり、軍人や警察官などの制服を六月一日に夏服へ、十月一日には冬服に「衣替え」することに決した。これが次第に制服のある学校やスポーツ用の企業にも広がり今日に至っている。地域や気候差での違いはもちろん、最近では制服のない学校も漸増傾向にあり、必ずしも六月一日、十月一日とは限らないが季節感を醸し出す風習のひとつとして続いて欲しい。

などと偉そうなことを言っただけでみたものの、暑さに感じて夏物は部屋一面に広げっぱなしで、きちんと整理しないうちに「衣替え」の時期を迎える羽目に。これも今年の異常気象のなせる業、と自己弁護する今日この頃である。些か物悲しくもある秋を迎えると、漢学者でもあつた角光嘯堂作の「旧都の月」が思い浮かぶ。

故里ふるさととなりにし奈良の都にも

紅葉散りしく 秋は來にけり

猿沢の池の辺ほとり凋落の夕べ 水揺ゆぎ星流ながれて揺落よろ逢う

夕月影は寒し浅茅が原 絡緯らくい声は悲し三笠の秋

落葉らくよう散り尽す京洛の終はて 暮鐘ぼしやう幾点盛衰を寂かなしむ

私が詩吟を習い始めて間もない頃に、先輩と三人で連吟をしたのは、五、六年ほど前の事だっだろうか。因みに、古今和歌集に収められている奈良帝（平城天皇）の歌に

故里となりにし奈良の都にも

色はかはらず花は咲きけり

がある。時の移ろいをより深く感ずるのも「秋」故なのであるうか。読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋、行楽の秋、健康に留意しながら「秋」を存分に楽しみたいものである。

楽しい時間 132

山本紀久雄

2023年9月30日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十七

天皇を戴くことで倒幕に成功した明治維新政府であるから、天皇が存在しなければ明治政府の基盤は成り立たなかった。

また、それまでの天皇はあまりにも一般民衆にとつて無縁な存在であり、一日も早く天皇の姿を国民に示す必要があった。さらに、天皇親政の実を表すためにも、天皇の視覚化は政治的に最も重要な課題であった。それを示すのがアーネスト・サトウ著『外交官が見た明治維新・下』（岩波文庫 1960刊）の記述である。

『1868年11月26日（訳注 明治元年10月13日）、品川で泊された天皇は、この日午前十時ごろ江戸へ入られた。・・・中略・・・私は、以前ハリ・パークス卿の官邸に用いられ、今では外務省みたいな役所になっている屋敷の、新しい門の前に最近できた広場に立ちながら齒簿（天使が巡幸する際の行列や車駕・儀仗の前後の順序）を眺めた。外見は必ずしも壮観とは言えなかった。いやに西洋をまねた服装と、だらしない乱髪**の**兵隊のために、廷臣たちの服装から受ける東洋ふうの印象が台なしにされたのである。

天皇の黒漆塗の駕籠（鳳輦）は、私たちには実際珍しかった。それが近づくにつれて、群衆がシーンと静かになったのは、まことに感動的であった』

この記述、外国人であるサトウが感じた最後の「シーンと静かになった」というところが重要で、それは民衆の天皇に対する感情を示していた。

さらに、この時は既に民衆は、土下座していないことも新時代を演出している。

それは、民衆は、今までの天皇は京都御所深くの空間的存在であつて、現実的な権威とは受けとめていなかった。だが、新時代に入つて、実際に東京へ行幸する具体的な天皇の姿に接し、国民となった民衆は天皇を「空想する」という段階から「現実的存在」へと認識を改め始めたのである。つまり、政治的、精神的な中心として天皇をとらえ始め、明治政府の戦略が意図通り伝わっていったことを意味する。

そこで次なる課題は、天皇の容姿である。天皇という存在は実際に存在するということは認識した。だが、その天皇とはどのような姿であり、仰ぎ見る存在として受け入れられる人物実態なのか。そこに視点が移っていく。ここで出現したのは写真という技術・手法である。

天皇服装の変化を見ると、明治3年（1870）4月の陸軍連合訓練時には、直衣を着て袴を^{おし}はいて馬に乗っていたが、明治4年（1871）の操練時には洋装（軍服）となり、5月頃からは皇居内でも政務をみる御座所では洋服を着用し始めた。

そこで明治5年と6年に、当時、浅草で写真館を構えていた内田九に撮影を行わせた。これが明治5年の束帯をつけた和装の写真と、翌6年に撮影された断髪姿の洋風写真であり、洋風写真がその後15年間にわたって外国の君主に贈られた写真であった。

ところで、明治天皇は写真嫌いであった。入手可能な明治天皇の写真は三枚である。

- ① 明治5年（1872）二十歳時の「束帯」姿の写真
- ② 明治6年（1873）二十一歳時の「洋風」姿の写真
- ③ 明治21年（1888）三十六歳時の民衆が礼拝した「御真影」としての肖像画

天皇として人間であるから、年々歳々変化していく。明治6年の写真をもって15年間も維持してきたが、外交的に写真交換するものとしては限界があると宮内庁は考え、改めて明治21年に写真を用意したのである。

また、この時期は、翌22年（1889）大日本国憲法公布の年に当り「国家の機軸を皇室におく」というタイミングと重なり、機軸にふさわしい天皇像が求められ、23年（1890）には国会開設があり、「理想の君主像」としての「御真影」肖像画が登場したのであった。



(明治5年二十歳時の「束帯」写真)



(明治6年二十一歳時の「洋風」写真)

この「理想の君主像」を描いたのは、明治8年（1875）に大蔵省紙幣寮の招きで来日し、以後長く紙幣の原版の意匠、彫刻、印刷に携わったイタリア人、エドアルド・キヨッソーネである。

そのキヨッソーネが明治21年に描いた肖像画を、内田九一が明治8年に三十一歳で早世した後、当時東京で最も有名な写真家の一人であった丸木利陽が、キヨッソーネの指導のもとに「試写数回、数十日を費やして」（明治天皇紀）複写し、写真として仕上げたのである。



いよいよ明治21年の民衆が礼拝した「御真影」としての肖像画が、いかに優れているかの検討に入りた。この「御真影」によつて、明治天皇が理想的君主であったという国民からの決め手となつたのであるから、そこには見事な「何か」があるはずである。また、その「何か」を探る糸口は、明治6年21歳時の「洋風」姿の写真との比較であり、その比較を通じて15後の天皇がいかに深化されたかを窺うことにしたい。それが鉄舟の明治天皇への扶育による影響についても探ることにつながるからであり、そのため両方の写真を見比べて検討したい。次号に続く。

『酔いの徒然』（二三九）

丸山 酔宵子

『自由が丘の居酒屋』

由が丘駅ロータリーを右に反転、ガードをくぐったゴチャゴチャした飲み屋街の一角に我が愛する居酒屋「金田」がある。

東京の居酒屋ベストテンでは必ずベストスリーに常時ノミネートされ、彼の著名吞兵衛作家山口瞳、吉行淳之介、伊丹十三などは勿論、パンチの効いたジャズ歌手しばたはつみも日本酒好きで、いつも美味しそうに常温「菊正宗」を飲んでいた。

「金田」に最初に行ったのはもう彼これほぼ半世紀程前になる。

敢えて、恥を忍んで告白すれば、その当時、健気に惚れ込んで、一途に追い掛け回していた彼女が、自由が丘の深窓の令嬢で、彼女のお兄さんが常連にしていた「金田」を紹介されたのがきっかけである。

デートと言えば「金田」で、その頃は未だ酒の味もわ

からず、只管、酒量を誇っていた時期でもあるが、流石に料理の美味しさは格別で、お金も無いのによく食べたと記憶している。

しかしその淡い恋も、「貴方とは人生の価値観が違ふ・・・」とあっさり言われ、「人生劇場」ではないが、儂い恋も花と散ったのであります。

アー、ズンタッタ、ズンタッタ・・・。

熱燗の徳利注ぐコップ酒

酔宵子

それから十年間は、自由が丘近辺は鬼門で、近くに來ると胸がキューンとなるような時代もあったが、九品仏、八雲に居を構えることになって、再び、いやもつと熱烈な「金田」ファンとなって戻ったのである。

東京の居酒屋で、トップスリーを上げると言われれば、異論は多々あるかも知れないが、「金田」の他は、湯島「しんすけ」、秋葉原「赤津加」である。

その三店に共通する居酒屋の条件とは、敢えて独断と偏見で言えば、

一、いつもいかなる時も親父か女将が、定位置でお客を迎えていること。

二、勿論料理が新鮮で誠実で季節感があり美味しいこと。

三、有線などでのBGMは不要で、BGMはお客の穏やかな会話とお店とお客の掛け声であること。

四、いかなるお客に対して、いついかなる場合でも公平であること。

「金田」は初代が戦後のどさくさ混乱の中、自由が丘駅前で屋台の居酒屋をはじめたのが始まりである。その後昭和40年ごろに、現在の場所に引越し、3階建ての堂々たる自前店舗を構えたのである。

因みに、一階壁面には、現在でも自由が丘の屋台の呑兵衛の様子を巧みに描いた、プロレタリア画家の油絵が堂々と飾ってある。

外套の襟を立てつつ屋台酒

酔宵子

「金田」は常連に恵まれ、日本航空のパイロットとか

スッチーなども加わり「金田学校」などのグループも出来上がった。

しかし、初代が突然倒れ、明治学院大を出て、東急電鉄に勤めていた長男が急遽後継を継ぎ、現在の堂々たる居酒屋に育ててきたのである。

大学時代はワングルで鍛え、山を愛した二代目も、10年程前、突然の心筋梗塞で亡くなってしまった。葬儀は等々力の満願寺で行われ、お通夜には日曜日にもかかわらず、400人以上の弔問が訪れ、その多くが常連客であった。享年74歳。

二代目亡き後、京都料亭で修業した「モックン」似のイケメン独身の次男が板場で頑張っていて、コロナ禍でも地道に、丁寧な、我々呑兵衛を温かく迎えてくれて、今も相変わらずの繁盛である。

アマダイの煮付けに香る山椒の芽

酔宵子

おむすびころりん

高橋育郎

おむすびころりん　ころがった
じいさんあわてて　おいかけた
おむすびあなへと　おちていく
あららじいさんも　おちていく

あなのなかでは　ねずみたち
おいしいおにぎり　よろこんだ
ごちそうさまです　おじいさん
おれいに　はこをば　あげましょう

じいさん　ちいさいはこもらう
いえにかえって　ばあさんと

あけてびつくり　たからもの
よくばりじいさん　みてたとさ
わしもたからが　ほしいよと
ねずみのあなへと　おちていく
さあさ　だせだせ　はこをだせ
じいさん　おおきいはこもらう

よろこびかえって　あげたらば
なかからおばけが　にろんによる
よくばりじいさん　こしぬかす
もうこりこりだ　ごめんさい

かしの実

高橋育郎

かしの実　かしの実　そら落ちた
雨降るように　パラパラと
風に吹かれて　落ちてきた

かしの実　かしの実　まだ落ちる
うらの山には　鈴なりの
鈴を振るよに　落ちてきた

山から木枯らし　吹いてきて
かしの木山に　冬が来た
かしの木山に　冬が来た

絹の話 (156)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

平安時代の貴族と絹 (その2)

平安時代までの絹生産事情

日本の養蚕は米と一緒に伝来したと思われれます。それは紬で、薄くて軽く艶やかな絹織物ではありません。繭から生糸を揚げ織物を作る技術は3世紀初期朝鮮半島や中国の渡来人からもたらされたと思われれます。

その時期、日本としては大変ラッキーな機会を得たのです。というのは中国の春秋戦国を平定した秦が国民に重い税と万里の長城を増築するために過重な労役を負荷させた為、4,000万国民の内2,200何人が周りの国に逃散するという事態が起きていました。朝鮮半島の高句麗や百済にも色々な進んだ技術を持った人々が流入して来ていました。当時の日本の人口が60万人であった事を考えると、民族大移動とも言える規模でした。

大和政権(応神天皇)はその人達を積極的に迎え入れ、新しい土木(壮大な墳墓建設が可能になる)、養蚕、冶金などの技術を取り入れ、国の近代化を図りました。

奈良時代になると農業の進歩と共に人口も450万人に達し、それを統治する貴族も増え、絹の需要は増すば

かりでした。百済等から機織り集団を招聘し、機織り専用の建物を作り、織部司(服部)で雇用して増産に励み、その子孫を各地の国司を通じて郡司の元に派遣し、製糸技術の向上を図り、良質な糸を都に送らせていました。

糸は出来ても殆どの民衆の家が弥生時代と同じ堅穴式住居であったので繊細な機織りには不向きでした。

平安時代前期にやっと自国で中国にも劣らない薄い綾織などが国内で織れる様になりました。

平安貴族の人数

平安中期、春夏秋冬季節に合わせて絹の装束で出仕しなければならぬ貴族は200名あまりと言われていましたが、その家族、臣籍降下させて地方に住む天皇から姓を頂いた平氏や源氏なども合わせると、絹の需要は増すばかりでした。

平安時代の陰陽道

陰陽道は中国の陰陽五行説に基づいて平安時代に日本で成立した占術で、平安中期国家専属の占い師の安倍晴明などが活躍していて、仏教信仰と合流した北斗信仰などが貴族の生活を支配していました。

朝の3時起床して北斗七星を拝し、占いをして凶と出れば物忌みして家に籠り、また方違えして登朝し、風呂殿または湯浴(2日〜5日に1回)や爪切りなども占い

をして行われていた様です。

平安貴族の服装

平安中期、貴族の服装は養老律令に記載されており、それ以外の服装をする時は天皇の許可が必要でしたが、遣唐使も廃止され装束も唐風から、日本の気候と座るといふ生活環境に順応してゆつたりとした(特に表袴)日本風に変わり始めてきました。

男性貴族の正式な服装は束帯(女性は十二単)

年間200余りの儀式に参列する上級貴族は遊んではかりいるわけではなく、意外に気が休まる日がありません。男でも季節にあつた襲の色目の着用は出世の糸口になることもあり、身分の高い姫君と縁を結ぶきっかけにもなる大切な装束です。

束帯も十二単と同じように何枚も着重ねます。最後に着る袍の色は天皇が黄櫨染(屋内では茶、屋外では赤茶に変化)、皇太子が黄丹(橙色)、上皇は赤、四位以上は黒、五位が緋(赤系色)六位以下は縹(青)と決められています。また文官および四位以上の武官の着る袍はそれ以下の武官が着る袍とは縫製上の違いがあつたりして、男性の装束は官位により複雑多岐に渡ります。

準正装は衣冠です

これは宿直着ですので、束帯の時着用していた石帯(鹿革の帯)や太刀、下襲(後ろの裾を長く引き、身分が高いほど長い)、襪(指のない足袋)などは用いず、笏笏(象牙)の代わりに檜扇(夏は蝙蝠:5本骨の和紙を張った扇)を持った身軽な装束です。これが平安後期には正式な場所でも認められる様になりました。

貴族の日常着

直衣は貴族の普段着、宴会着で、衣冠と似ていますが色の決まりのない袍を着て冠ではなく烏帽子姿です。源氏物語絵巻では夕霧の桜襲が有名です。

貴族の略装

狩衣はもともと狩猟に着用した中流貴族の普段着で、袍より身幅は狭く、下の単が見えるくらい自由に動けるくつろぎ着です。

冠と烏帽子

冠は正装で烏帽子は普段着用です。平安時代には頭の鬘を見せることは非常に恥ずかしい事でした。同じ様に貴族の女性は親兄弟の他には顔はおろか名前も知らせませんでした。

「江上浩二の独り言」 71 江上浩二

クローン羊誕生とその後

ChatGPT・生成AIよりもっと気になる事が、湧いてきた。1996年クローンドリーの開発者、イアン・ウィルムット氏（英国）が79歳で亡くなられたというニュース記事が今日9月12日報じられていた。偶々なのであるが、最近アミノ酸の円偏光に興味があって、特定のアミノ酸類の組み合わせからなるDNAについて素人勉強をしていた。細胞の中には遺伝子情報が詰まっているDNAや遺伝情報を転写、アミノ酸の収集とタンパク質の合成をつかさどるRNAなどが含まれ生命体を維持している。

まず、アミノ酸の円偏光であるが、アミノ酸レベルの高分子になると全く同じ分子組成で鏡像関係にある2つの立体構造（右・左タイプ）が存在し、全く同じ化学的性質を有するが、物理的特性で光を当てると右回りの偏光特性を示すものと左回りの偏光特性を示すものとに分かれるのが知られている。

ここで少し宇宙的现象についてお話する。

太陽の様な水素H₂からなるガス球で核融合反応が進む

と元素の周期律表の鉄Feまでは創られるそうだ。理科でよく聞くクラーク数、人の身体に含まれ生命維持に大切な微量元素元素はFeよりも重たく、そのような金属はどのような現象で宇宙的に創られるのだろうか。

そうです、聞いたことがあると思いますが超新星爆発で重い金属まで核融合が進んでその残骸が吹き飛ばされたのです。そういった宇宙のプロセスで形成された微量元素が我々の生命維持に重要な役割をしているのです。

クローンは全く同じ遺伝子DNAを有する生物個体。自然発生的には一卵性双生児がそうである。人のDNAは複数の異なったアミノ酸の組み合わせから出来ていて、世界で初めて黒っぽい色をした小惑星のサンプルを持ち帰った日本のはやぶさ2のサンプルを詳しく調べたら、色々なアミノ酸、それも左右タイプのもが見いだされたという。これは確率的に宇宙空間のある化学的反応が促進できた環境であったということでしょう。

哺乳動物のクローン、非常に難しいが1%以下の0・X X%で成功するらしい。

食肉用家畜牛のクローン、表示義務なし、出回っているらしい。

中国が猿のクローン誕生成功、ある国の研究者は私はやらないと断言。

その裏にある研究、幹細胞、ES細胞、iPS細胞の組織培養・臓器分化可能性があるうちに、自分の細胞をもとにクローンである培養組織を使う治療、しかし、易しくはない、免疫抑制、癌化抑制、コスト削減のために特定個人の組織細胞を共通化して万人に適用化する研究も開始されているが、課題も多い。

数年前には、臓器が動物の体内位置で、複数の特定臓器同士の立体的配置を備えた培養サンプルを国内の著名大学の若手研究者が開発していることも知った。

受精卵・分化可能性、高等生物は進行するにつれて分化可能性は失われる。人工授精に対しても現在では何も批判は言われなくなった。一卵性双生児は自然なクローン。究極でSF的な、脳が無い臓器移植の為にクローン人の医療的開発応用を良しとする？ 私は断固として否と言いたい。

一方地球上の植物生物は非常に多様で、生きるということからすれば食物連鎖の初めに当たる、動物への必須アミノ酸を供している。

ソメイヨシノ（桜）はそもそも植物のクローン。江戸時代に作られ、以降接ぎ木で世代を継承、同じDNAであることが確認されている。接ぎ木は平安時代から知られていた。クローンの傾向、開花時期が早くなるという。単に温暖化ではない。

挿し木もある。小枝を土に差し込む。植物の細胞が分化全能性を有する。最近の情報では茄子のように2段階接ぎ木でないとうまくいかないものもあり、病气予防の為に、台木、中間台木も使う。渋柿に甘柿を接ぎ木する、60年前の私が10歳前頃に母方の祖父がやってくれたことを覚えている。今夏8月下旬にNHKBS放送で、樹齢1300年のやくし桜の小枝を30年前から接ぎ木し育て、それから何百本もの苗木とし、全国各地へ配布して親木と同じくさらに1000年も花を咲かせ続けたいとする仕事をする90歳の古老の話は気持ち晴れ晴れとする。

丁度脱稿しようとしていた10月2日にノーベル医学生理学賞が、新型コロナウイルスが蔓延し、その緊急対応策としてmRNAワクチンを開発した2名の欧米学者に授与されるとニューズが飛び込んできた。これは高等動物、究極の人間であるが、誰しもが病になると、生きたい、人のお世話になっても、つまり他人の臓器移植まで望み、長い道りであるが本独り言で呟いたクローン人間の臓器、その臓器の組織細胞を欲する研究、ES細胞、iPS細胞、体幹細胞まで行きつくと、植物の接ぎ木の晴れ晴れとした気持にはなれないのである。



初狩便り
(24)



花野みぷり



収穫祭

今日はお祭り。米の豊作と畑作の収穫を祝い、事故なく無事に農作業ができたことに感謝して、全員集合。

まずは四升の米を羽釜で炊く。「お焦げを作って！」という注文を受け、難しい火加減となる。炊き上がった米は光沢があり、とても良い香りとする。おにぎりは、塩をひとつまみ^{ひとつまみ}掌に乗せ体温で溶かして素手で握る。釜の底にうつつら「お焦げ」が出来ている。そこに醬油をさあつと回しかけ、「お焦げおにぎり」を作るが、たくさんはできない。早朝から準備をしている人だけがありつける究極の旨さだ。

もう一つのメニューは里芋のたっぷり入った「芋煮」。掘ったばかりの里芋を早朝から剥きにかかる。一番手間のかかる作業だが、男性陣が頑張る。三キロの牛肉と牛蒡、舞茸、蒟蒻、長葱を加えて、三十六人分の「芋煮」が出来上がった。酒好きの仲間が多く、生ビールで乾杯！一年間の農作業の喜怒哀楽を語り合い、にぎやかな宴会が続く。日本酒の一升瓶も次々に空いて、「みんな呑み過ぎ！」。酷暑の夏や獣害に悩まされながら過ごした日々も今日は笑い話となる。仲間とともに収穫を喜びあう時間は、何物にも代えがたい。

(写真：菅野昌英)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2023年10月2日

腸内環境

10月が始まりました

気がつけば 今年も残り3ヶ月になりました

彼岸が過ぎ 蒸し暑いですが

秋らしい日差しと風になってきましたね

この季節の変わり目

自律神経 腸の問題が出やすくなってきています

寝つきにくかったり 夜中に目が覚めたり

頭痛が出たり 腹痛が出たり 放屁の量が多かったり

下痢したり などなど

どれも免疫にも絡んでくる症状です

そこで

3S+ゆたぼん+ヨーグルト十八分

はもちろん大切ですが

特に ヨーグルト 腸内環境

が大切になってきます

季節が変わるので 先ほどあげた症状が出る場合

ヨーグルトの種類と回数を変えることをお勧めします

身体も季節や環境

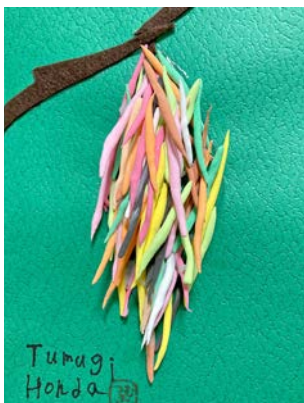
によって変化する

ので

便の回数や状態に

よって変えていき

ましょう
今日も笑いながら
行きますよっ



2023年10月6日

良い加減

朝から涼しく

虫の鳴き声もすっかり秋らしくなりました

秋といえは食欲の秋ですね

美味しいものが沢山あります

この時期

夏の疲れと寒暖差により内臓が疲弊しています

そうしますと 自律神経の乱れが

内臓の動きが悪くなり 身体の流れも滞ります

そうしますと 身体全体や心が不調になり

免疫が落ち ウイルスに感染しやすくなります

そんな状態で ついつい食べ過ぎたり

寝る前に食べてしまったりしますと

疲れ果てた内臓に残業を強いる様なものです

そこで

3S + ゆたぼん + ヨーグルト + 八分の 八分 です

もう少し食べたいな というのを抑えて

腹八分 を意識しましょう

中々難しいですが

最初は 3日に1回から始めてみるのも良いと思います

慣れてきたら少しずつその回数を増やしていきます

何事も やり過ぎは良くありません

何事も ほどほどに 八

分に 良い加減 で行

きましょう

今日も笑いながら行きま



「唾液が大事」

口は 潤いある器官

いのちの入口 門戸なり

舌・咽喉・菌等の粘膜を

二つの唾液が 潤して

いのちの働き維持される

一つ目 涎よだれは脾の液で

口からたらりと 垂れる液

お腹が減って 胃に熱が

集まりや 涎が出てくるぞ

よく噛みや 涎が分泌し

食と混ざりて 味となり

喉の通りもよくなりて

食べ物 胃の腑へ流れ込む

涎が出なけりや 味出でず

喉もつまりて しゃっくりし

胃腸の消化も悪くなる

二つ目 唾は腎の液

粘りて ぺっと吐ける液

口中・咽喉・菌や菌茎

粘膜 唾が潤して

表面保護して守ってる

唾の粘りがあることで

口の中の害のある

病原や有害物質を

吸着・無害化 処理できる

唾が少なきや 口荒れて

喉はイガイガ 邪氣まじまじ勝る

目や頭を酷使して

緊張・興奮 口呼吸

唾液が乾いて出なくなる

涎や唾を出すためにや

しっかりと咀嚼し味わいつつ

顔の緊張・顎と頬

ふんわり緩めりや 湧き出てくる

唾液が出でれば 口潤い

いのちの入り口 強くなる



「喜びは心の灯火」

人は喜ぶ 生き物で
喜び・楽しみ・嬉しさが
心を満たして 充実し
いのちは燃えて 輝きだす
これが幸福 幸せに
いきる 未来の道しるべ
喜ぶ道筋 二つある

一つ目 やりたいことをやる
自分の中から湧き出してくる
感覚 満たすが 基本なり
興味に向かって 動ければ
努力も苦労もなんのその
最後に達成 やりきれば
心は喜び 輝くぞ
嫌で 辛くて しんどいこと
続けりゃ 精魂 消耗し
心は虚して 荒つつ
やる気も 自信も翳ってく

二つ目 人と触れ合って
面と向かって 話すこと
いのちの本音を 言葉にし
相手の表情・顔色と
言葉と向き合い 交流すれば
心の動きが 火を灯し
通じ合えれば 明るくなる
交流避けて 孤立すりゃ
心は動きを失って
冷えて 縮んで 暗くなる
やりたい事を大切に
人と交流 することで
心が動けば 火がついて
ちいさな喜び ちよつとずつ
生まれりゃ いのちは明るくなる
まだ見ぬ喜び 灯火は
明るい 未来の道しるべ
喜ぶいのちが 未来をつくる



黒井峯遺跡に寄す

殿山木風

馬を飼うまい田かを耕たすは太古たがやの人ひと

名山噴火めいざんふんかして晨あしたを迎むかえず

上毛の遺跡じょうもうは千年せんねんの睡ねむり

往時おうじを探究たんきゆうすれば詩史しし新たあらなり

寄黒井峯遺跡

飼馬耕田太古人 名山噴火不迎晨
上毛遺跡千年睡 探究往時詩史新

(語釈) ○黒井峯遺跡：群馬県榛名山の北東の方角約14kmの地点に火山噴火により千五百年前の埋没したムラが発掘されている。昭和六十一年元旦に「登呂遺跡の発見に匹敵」「六世紀の農村(完全遺構)」と全国紙に新聞報道された。

○太古：厳密には古墳時代。○名山：榛名山。上毛三山の一つに数えられる名山。○晨を迎えず：一瞬にして大噴火に降った軽石の下敷きになったの意。○千年の眠り：事実は千五百年が経過している。千年とはとても永いの意。

○詩史：史実を詩の形でうたったもの。

(通釈) その頃、既に馬を飼い、田を耕す豊かな営みの太古の人がいた。

ところが、榛名山が噴火して集落は一瞬にして埋没し、被災者は次の朝を迎える事は出来なかつた。

上毛遺跡群は永い永い眠りの中にあつたのだ。今、渋川市教育委員会などで発掘調査がなされたが、往時の様が深く研究されれば史実を語る新たなうたが生まれるのである。

※渋川市教育委員会に奉仕活動を行っている岳精会会員から詩作の依頼があつた。人に頼まれて作れる者ではないが、お話しを聞いてロマンを感じトライしてみることにした。資料を送ってもらつたが、遺跡群として火山噴火によって埋もれた所が散財しているようだ。

中には甲を着たまゝの姿があつたり、田の畦があつたりで古墳時代はなかなか高度な生活をしていたようだ。私は火山で一瞬にして埋まつたと云うことでボンベイ遺跡を連想した。

編集室だより【二〇二三年八月】

今泉 由利

地球に生まれ、地球に育ってきたことには違いないけれど、本当の地球の海を、大きな船に乗って。その時までは、何も知らなかった。

海に夜がきて、天空の星、天空の月、どこにも陸など見えない、海だけの景色を何十日間……。カリフォルニア、パナマ運河、メキシコ沖を通っている時は、陸があるのだ！と思えた。南米沖を通過中「ホテイアオイ」がプカプカ浮いていたのは、なぜか忘れない。

そんな風にして、船に乗ってから四十五日たつと、ブエノスアイレス港に着いた。下船をしなければいけないのに、船を下りて、どこへ行く！という住所が要ることを知る。私の全持物を、どこへ運ぶか！という算段を、気付けていなかった。

行く先のない、引越し荷物を、埠頭の波打ちぎわ近くに降ろすと、乗ってきた船は、出航して行った。

しばらくは、荷物の上に座っていたけれど、夜になる。雨は降る。ブエノスアイレスの冬はけっこう寒い。

昼間は、荷物を置くべき家探し……。ようやく10階に、家とするべきところを見附け、港からの荷物を運び込み、とにかく、アルゼンチン国に住所が出来、引越し荷物のなかから出てきた「大工道具セット」をフル活用して、梱包材で、机を作った。起きている間中、絵を描いていた。

隣のドアに、アベ・マリアと表札の方が、「あまり閉じ籠っているから！」スペイン語を教えて下さる……という先生を連れてこられた。その先生が「知り合いに画廊をしている人がいる」と。

描いていた作品を持ち、画廊へ行く。

「セリーナ・アラウス・ペラルタラモス・デ・ピロバー！」
私が何度聞いても覚えられなかった、美しく、背高く、
高貴な…後に、ものすごく偉い、アルゼンチンのはじま
りにも関わるほどの家系の人であると知るのでした。

セリーナさんは、私の持参した絵を、すぐ個展をする、
と言われ…すぐ実行して下さいました。

三河アララギ十一月号の表紙は、セリーナさんが描か
れました。「アルゼンチンの大草原の夕焼」セリーナさ
んが、私のアルゼンチン生活を、美しいものにして下さ
いました。亡くなられてしまいました。

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ 090・8434・8646
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利